

再生産論における「相対的自律性」概念

ーアルチュセール、ブルデューの議論を中心にー

秦野伸介（京都大学大学院）

教育社会学における再生産論とは、社会構造（生産様式、階層秩序）の再生産に文化的なシステム（上部構造、象徴システム・教育制度など）がどのような影響を及ぼすかを論じる理論である。本報告はこの再生産論の中に存在する二つの系ー社会構造と文化的なシステムーの連関を、再生産論がいかに説明しようとしているかに着目する。

もともとはマルクス主義経済学で多く用いられた（生産様式の）「再生産」という概念に、「文化的」な要素を含めるようになった出発点は、アルチュセールの「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」であると言ってよいだろう。アルチュセールは、マルクスが資本制社会の再生産を論じるに際して、「労働力の再生産」におけるイデオロギーの重要性を軽視したと指摘し、そこに目を向けようとする。「アルチュセールは土台から上部構造へ再生産の議論を移行」させたのである。こうして、マルクス主義においても、「教育」を主題に据えることが重要な意義を持つことになる。主にアメリカにおけるマルクス主義教育社会学はこの流れに沿っている。

一方、バーンスタインやブルデューのように、言語使用や教育達成の不平等から階層論へと向かう流れも、再生産論の中に含まれる。この議論はマルクス以外にウェバーの議論も引き継いでおり、先の流れとは同一視できない。しかし、関心の出発点が文化的な領域からであっても、その背後に階層秩序を見いだした時点で先の議論と同様の枠組みを採ることになる。すなわち階層の再生産に文化的な要因がいかに影響を及ぼすかという議論の組み立てである。

このように理論の出自の違いはあれ、再生産論には階層・階級といった「経済」の系と、教育・イデオロギーといった「文化」の系の二つの系がとりあえず立ち上がっており、その連関が問題とされるところで共通点を持っている。本報告はこの連関を説明するキータムとして「相対的自律性」概念を取り上げる。この概念はマルクス主義の理論展開の中から登場したものであり、なおかつブルデューも引き継いでいる。この概念は文化的な領域の固有性・自律性と、それに

も関わらず経済的な領域に規定され、従属している事態を言い当てようとするものであり、階級・階層の再生産を、文化的要因を絡めて説明しようという再生産論では無視し得ない概念となる。

しかしこの「自律性」の内容は、論者によって少しずつ異なっている。アルチュセールは、構造と構造の（一方的な従属関係ではない）結びつき方の説明として、この概念を用いた。ところがその後のマルクス主義の議論においては、教育システムを媒介とした社会変革の契機として自律性が主張され、さらにシステムとその変革の主体としての個人との関係が問題とされるようになる。一方ブルデューは、構造と構造をつなぐ媒介としてのハビトゥスの自律性として問題を立てる。こうしてマルクス主義においても、ブルデューにおいても、構造と個人との関係が議論の焦点となる。

本報告は課題を以下の二つに設定する。

第一、教育システムと経済的構造という構造対構造という議論の枠組みが、構造対個人という枠組みで論じられるに至る、こうした議論の推移がなされる内在的なメカニズムと、そこから生じる問題点を指摘することである。その中で、ブルデューとアルチュセールの関係（類似点、相違点）もあわせて論じることになる。第二、複数の構造の各々の自律性とその連関を同時に説明しうる社会モデルはいかなるものであるか、を考察する。アルチュセール、ブルデューはそれぞれいかなる総体的な社会モデルをどう構想したか、そこにはいかなる限界が残されているか、を検討する。

マルクス主義においては土台と上部諸構造との関係は常に重要な問題であった。ここでは、土台とは生産様式・経済的構造、上部諸構造とは文化的・政治的な諸制度のことである。もっともプリミティブなマルクス主義思想においては、物質的世界の生産・再生産を支える土台こそが第一義的な存在であり、上部構造に属するとされる領域の事象は土台から説明されるものとされた。物質的に基礎づけられた支配階級の利害に則って、国家は形成され、そのもとで様々な諸制度が形作られるのだ。

このようなマルクス主義が、経済以外の領域を軽視し、現実の社会の多様性を理論的に組み込めない、経済還元論だと批判されたのは当然であろう。「上部構造」をいかに理論の中に組み入れるかはマルクス主義当初からの課題であった。土台が上部構造を規定するというマルクス主義の公式をそのまま維持しては、経済還元論から脱却できない。それゆえ上部構造から土台への「反作用」を設定するもくろみは、エンゲルスによって既に試みられていた。

ここには既にジレンマがある。土台と上部構造が対等に相互作用を及ぼし合うというモデルでは、マルクス主義のアイデンティティは失われてしまう。それゆえ、究極的には土台がすべてを規定しているのだという項目ははずせない。しかしそれでは一部譲歩しただけで、結局は経済的な領域を特権化している還元論であるという批判から免れてはいない。つまり「反作用」を持ち出すだけでは事態は進展していないのである。

そしてこうしたジレンマはマルクス主義の専売特許ではない。マルクス主義的な経済一元論からの脱却、あるいはそれへの批判を、「それ以外」の構造を重視することで可能にしようというところみにおける各構造の自律性もまた相対的なものにならざるを得ないのだ。なぜなら、もし自律性が完全なものであったなら、構造と構造のあいだの関係を考えること自体が無意味だという事になるからである。そういう議論を行うのであれば、そもそも最初から「経済」対「それ以外」という枠組みを採る意味がない。マルクス主義者ならぬブルデューもまたこのジレンマと無縁ではない。

この矛盾した事態をとりあえず表現した概念が、アルチュセールの「相対的自律性」概念である。アルチュセールがこの概念で、土台→上部構造というモデルを越える、いかなるモデルを提示しようとしたのか、が課題となる。

アルチュセールのモデルは、時には十分に咀嚼されないまま、多くの論者に受け継がれていった。彼の「相対的自律性」を引き継いだ論者として、ボールズ、アップルといったマルクス主義教育社会学者や P. ブルデューを挙げることが出来る。しかし彼らの議論が先に述べた形で、個人対構造という枠組みで「相対的自律性」を説明していくとき、議論の焦点が新たな社会モデルの提示から個人の社会化と自立性という伝統的な枠組みへとシフトしてしまう。マルクス主義教育社会学においては、かかる自立性が社会変革の契機として捉えられていき、またブルデューはハビトゥス論

という形で「構造化する」場面と「構造化される」場面として、構造の二面性を語ることになる。

確かにブルデューは再生産を論じるに当たり、全体と個人という先験的なものを設定することを極力避けようとしている。しかしその際に、この両者を関係論的な（先験的でない）社会空間とハビトゥスという概念に置き換えることによって、全体と個人の相互作用によって再生産を論じるという枠組み自体は残ってしまった。この枠組みは、再生産される事態の説明には全体→個人の作用を、変革される事態の説明には全体←個人の作用を説明に用いることになる。マルクス主義教育社会学のボールズは再生産される事態を重視し、それを批判した後のマルクス主義教育社会学では変革される事態が重視された。そしてこの全体の構造の（再生産されるか、変革されるかという）一方的な性格付けを嫌ったブルデューは、全体と個人の双方向の作用を対等に論じようとして、折衷的なモデルを提示することになったのである。

アルチュセールは、相対的自律性という概念を、単に構造が再生産されたり、されなかったりという事態を説明するための概念として用いたのではなかった。個別的には自律的に振る舞う行為の集積が、総体として構造を再生産していく事態を説明するための概念だったのである。そして、このことは秩序の内面化の論理からも、逆に個別的な行為の自律性の強調からも説明され得ない。さらにその折衷から説明できるものでもなかったのである。それに対して、アルチュセールが示した方向性は、構造全体を、担い手とその関係に分解することなく、循環的な総体として捉えようとするものであった。アルチュセールはかかる総体をヘーゲル的な全体性（「表出的全体性」）と区別して「複合的全体性」という概念を提示した。

しかしアルチュセールの「複合的全体性」は、これ自体が諸構造を析出する「本質」「主体」となりうる危うさを持った概念である。結果としての諸構造を支えながら、それ自体がアプリアリな原因ではない関係を両者の間に立てなければならない。

かかる因果関係をアルチュセールは「構造論的因果律」と命名したが、新たな言葉を提示する以上に必要なのが、この概念をモデルとして提示し説明することであろう。この点に関してアルチュセールはいささか不親切な感があるが、多くの手がかりは残しているように思われる。発表ではこの手がかりを元にモデルを提示する予定である。